
冬の公園

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の公園

【Nコード】

N4070P

【作者名】

鹿の子

【あらすじ】

冬の公園でのある日の出来事。

報われない想いで繋がる二人。自サイトでも公開中。

毎週水曜になると、この公園の側に建つ公共の建物の一階には移動図書館が開かれた。

絵本から、こ難しい本まで、結構な種類と量の本が並べられている。

予約も出来るので、読みたい本を予めリクエストしておくとかの週には借りることも出来た。

冬の午後のわずかな日差しの中を、私と入れ違いに小さな子どもをつれた母子が図書館の中に入っていく。

ぞくぞくと、何組も。

カラフルなバギーに乗った子どもたちが、返す本を抱きしめていた。

そんな姿に胸がしめつけられる。

借りた本を小さなかばんにしまい、公園のベンチに腰掛ける。

紙袋から、近くのパン屋で買った栗のデニッシュを出す。

小さなかばんからは、自動販売機で買ったミルクティを出した。

それは、丁度いい具合にぬるくなっていた。

視線の先には、ロケットの滑り台で遊んでいる子ども達がいた。

つかの間の暖かさを求めて、子ども達は冬の公園で遊ぶ。

若い、もしかしたら私よりも年の若いお母さん達は、そんな子どもを見ながら話に花を咲かせている。

「子ども、欲しいの？」

声と共に、私の隣にその人は座った。

「……欲しいとか、そう簡単に言えるもんじゃないでしょ」

「確かに」

ふふふと笑いながら、その人は私の顔を覗き込んだ。

嫌なやつだ。

「最終的な決定権はオンナにあるんだから、だましてつくりゃいいじゃん」

「それに、何の意味があるの？」

嘘だ。本当は、何度そう思ったことが。

「意味、ねえ」

くつくくつとその人は笑う。

「人がこの世に誕生するのに、いちいち意味なんてあるの？」

香ばしいコーヒーの香りがする。

その人は大きな両手で、優しくまるで孵化するたまごを持つ様な手つきで、コーヒーの紙コップを持っていた。

そんな事を言ったら、この人は一体どんな顔をするだろう。

「キミだって、ご両親のナニかの弾みで出来た子かもしれないよ」
「そこに、法で守られた何かがあるか無いかの問題なんじゃないの？」

「いちいち、理屈をこねて抱き合う人っているの？」

その人の口から次ぎ次ぎと飛び出す言葉の数々は、そうだ。

全て私の言葉でもあった。

あの人に向けて。

友達に向って。

心の中で。

何度も何度も言った言葉だ。

「あんなの」

苦々しそうな表情で、その人は母子を見る。

「まぼろしだよ」

まぼろし。

その人の顔は、泣き出しそうな顔だった。

「幸せそうに、そう装ってる。嘘の姿だ」

その人の言葉で、私は再び公園の母子に目を移す。
さつき私とすれ違いに図書館に入った母子連れが、公園の中へと入ってきた。

子どもの手には、私も大好きな雪だるまの絵本が抱えられていた。

（少し悲しい本だけど、大丈夫かな）
ぼんやりとそう思う。

少し悲しい本だけど、あの子にお母さんは希望の有る続きのことを話してあげるかもしれない。

お父さんが、あの子の小さな頭をぽんぽんと優しく撫でてあげてもいいかもしれない。

全ては、私の知ることの無い世界。
今はまだ、知らない世界。

「私たちは、知らないんだよ」

その人に向って言う。

それは、同時に私への言葉でもある。

「つてことは、結局。馬鹿なのは俺たちか？」

吐き捨てる様に言いながら、その人は 立ち上がる。

「馬鹿じゃないよ。私もあなたも」

偶然、この街の隠れ家的バーで一緒になった人。

私より少し年下のこの人は、私より少し年上の恋人と一緒にだった。

私も、隠れるようにしてしか会えない恋人と一緒にだった。

私たちは同じだった。

公園の大きな時計が、昼の休みの終わりを告げる。
こくつと、長針が動くのさえ良く解る時計だった。

「馬鹿じゃないなら、なんなんだよ！」

その苛立ちも、不安も、焦りも。
痛いほど私には わかった。

「知らないだけなんだよ」

さつきと同じ言葉を繰り返す。

「だから、何なんだよそれは！」

結局ひと口も食べることが出来なかったデニッシュを袋にしまう。

「私たちはさ、まだ一つの物語しか知らないんだよ」

スカートの上には、デニッシュのかさかさとしたパイ生地が食べ
てもないのに散らばっていた。

指先でそれらを払う。

遠くで鳩が、こつちを見ている。

「妻とか、夫とか、夫婦とか、家族とか。そういう事を知らないで。
知らないのに、そういう事を知ったかぶりして色々と自分の都合の
いいように決め付けようとしてるんだよ」

雪だるまの絵本を、子どもはお母さんに渡した。

お母さんは につこり笑ってその本をおおきな布の袋にしまう。

お母さんが、子どもをバギーから抱き上げる。

子どもは、ロケットの滑り台に向って走り出した。
滑り台の上からは、（友達なのだろう）「しんちゃん」とその
子と呼ぶ声が聞えた。

その人は うなだれていた。

時折「うーっ」と言う、声ともいえない声をあげていた。

戻り仕度をした私もベンチから立ち上がる。

その人の隣にそつと立つ。

「あんたは、それでいいのか？」

その人が私の顔を見ないままにそう言った。

それでいいか？

「よくないよ」

いいわけないよ。

「でも、現実はそのだよ。私は 知らないもん。彼の家庭も奥さん
も子どもも。知らないことは否定できないんだよ。私が言いたい
のは、それだけだよ」

その人は 黙ってしまった。

どうにもならない思い、状況。

「あんたは、別れるのか？」

「別れたよ」

「……。俺は」

その人の背中に、冬の日差しがあたりだした。

その人には見えなくても、私には見える。

雲の切れ間から降り注ぐ清潔な冬の日差しが、その人を包み込んでいるのが。

私が一步 歩き出すと、その後について来るかのように、一步その人も歩き出す。

冬の日差しも、変わらずその人の背中を包んだまま。

その、丸い背中を暖める。

どうか、出来る事なら。

その人の心の中までも。

「俺」

「……うん」

晴れやかな顔をした母子が、私たちとすれ違いに公園に入ってく。きらきらと輝く、冬の公園。

わずかな暖かさがそこにはあった。

公園を出ると、すぐに信号が有る。

横断歩道があった。

青に変わると、信号機からは音楽が鳴りだす。

「……畜生」

音楽にかき消され、その人の言葉が良く聞えない。

よく聞えないけど聞えてしまった言葉を、私は聞かなかった振りをした。

「さよなら」

その人の背中に声を掛ける。

さよなら

あの人こそ、まぼろしかもしれない。

私が私に見せた、私自身のまぼろし。

ざくざくと歩く都会の人々の渦にのみ込まれていく、丸い背中。
どんどんどん遠くなる、その姿。
もう見えない、その姿。

私の恋と、よく似た恋をした人。

さよなら

さよなら

点滅する青信号が赤く変わった時。

彼と別れてから初めて流れる涙が私の頬に落ちていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4070p/>

冬の公園

2011年11月13日20時21分発行